様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００９０８

研究課題名（和文）Hibakusha Lives and Collective Memory Communities in the 21st Century

研究課題名（英文）Hibakusha Lives and Collective Memory Communities in the 21st Century

研究代表者
Ｍ・Ｇ　Ｓｈｅｆｔａｌｌ（Sheftall, Mordecai）

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：９０３３４９５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：この調査の主な目的は、被爆体験だけでなく、戦前、戦中、戦後の日本人の生活全般に関する「語りの記憶」を持つ年齢の広島・長崎の被爆者からオーラルヒストリーのデータを収集することであった。この目的のために、被団協の各支部やいくつかの公的機関の協力を得て、録音インタビューに快く応じてくれる対象者を紹介した。プロジェクト完了までに、2時間から最長5時間に及ぶ37人の被爆者インタビューが録音され、後に一次史料や二次史料との照合によってその内容が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1945年8月の日本の都市への原爆投下に関する英文学術文献は、ジョン・ハーシー著『ヒロシマ』（1946年）を除いては、軍事作戦、技術、外交・政治的側面など、アメリカ側に焦点を当てたものが多数である。このような英語文献における被爆者の扱いは、表面的で二次元的な補助的役割として表現される傾向があり、単に原爆の威力を証明する手段として採用されるだけで、日本文化的な文脈はほとんど、あるいはまったく読者に提供されない。本研究の目的は、海外の読者（一般人または学者）のためにこのギャップを埋める貢献ができたであろう。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research was to gather oral history data from Hiroshima and Nagasaki survivors who were old enough to have “narrative memories” not only of their atomic bombing experiences, but also of prewar, wartime, and postwar Japanese life in general. Toward this end, the cooperation of various Hidankyo branches and also several public institutions was secured for introducing subjects willing to participate in recorded interviews. By the completion of the project, some 37 hibakusha interviews lasting from 2 to up to 5 hours in length were recorded, and their contents were later confirmed by crossreferencing with primary and secondary source historical material.

研究分野：近現代日本文化史

キーワード：hibakusha testimony　Hiroshima　Nagasaki　atomic bombing　bombing of Japan　incendiary raids　memory communities　postwar Japan

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1945 年 8 月の日本の都市への原爆投下に関する英文学術文献は、ジョン・ハーシー著『ヒロシマ』(1946 年）を除いては、軍事作戦、技術、外交・政治的側面など、アメリカ側に焦点を当てたものが多数である。このような英語文献における被爆者の扱いは、表面的で二次元的な補助的役割として表現される傾向があり、単に原爆の威力を証明する手段として採用されるだけで、日本文化的な文脈はほとんど、あるいはまったく読者に提供されない。この後者の問題は、すでにネイティブの文化的スキーマをすべて持っている日本人読者にとっては必ずしも問題ではないかもしれないが、日本人の生活世界や価値観についてそのような本質的な背景知識を持たない外国の読者の立場からすると、深刻な欠点である。被爆者に焦点を当てた数少ない注目すべき英語文学の例（ジョン・ハージーの『ヒロシマ』は例外である）を見ると、このような資料は、多くの場合、日本語の原文を英訳したものに過ぎず、過度に個人的、主観的、感傷的で、(一次資料の点で）十分に調査されていない傾向がある。このような資料では通常、一人の被爆者の証言に焦点が当てられるが、その場合もまた、本質的な文化的背景や歴史的背景が欠落していることがほとんどである。

2. 研究の目的

シェフタル主任研究員(PI)は、長崎大学原爆症研究所の峰万里子教授と富永雅夫教授の貴重な協力を得て、この「科研費」プロジェクトにおいて、戦前・戦中・戦後の日本人の生活を幅広く、かつ詳細に描き、1945 年 8 月の戦争における原爆使用に伴う真の（そして現在進行形の）人的犠牲について残酷なまでに正直な説明を、世界中の英語読者に提供することによって、英語文献におけるこの欠点を是正することに着手した。この研究の道徳的な立場は、これらの被爆者の証言は、人類の経験の歴史において計り知れない価値があり、世界平和と、願わくば最終的な核兵器廃絶の大義のために、可能な限り多くの世界中の読者に届くべきであるということである。このことは、戦争（いずれ核兵器が使用されるかもしれない）が世界の多くを脅かしている現在、特に言えることであろう。

3. 研究の方法

インタビューデータの収集と分析

シェフタル主任研究員は、COVID-19 危機によってインタビュー収集活動が中断される前に、37 人の被爆者と 2 時間から 5 時間のインタビューセッションを行い、記録することができた。このプロジェクトで体験談を話してくれる被爆者を見つけるという目的のために、以下の個人と機関が貴重な援助を提供してくれた： 関千枝子（1932-2022）(広島被爆者、ジャーナリスト・作家)、東友会（東京の被団協支部組織)、東京の被団協全国本部、長崎大学原爆症研究所、長崎県庁、カトリック長崎大司教区、大韓赤十字社、三軍総合病院（台湾）などである。

上記の機関（および個人）は、シェフタル主任研究員が被爆者にインタビューを行うことに同意した後、これらの機関、被爆者の自宅、または町内会会館などでインタビューを行った。インタビューは広島、長崎、東京、その他本州、九州、台湾、韓国で行われた。

標準的なインタビュー手順では、シェフタル主任研究員は被爆者に対する一連の標準的な伝記的質問（生年月日、家族構成、学校での経歴、被爆時の場所と活動、戦後の生活状況、原爆に関連した健康問題など）に基づいてインタビューを行った。戦時中と戦前の地図を大きく印刷したものも、被爆者の証言を詳しく説明するための記憶補助資料として使われた。これらのインタビューは、2 時間から（複数回の場合は）5 時間にも及び、パナソニックの IC レコーダーRR-XS700 でデジタル録音され、後にそのまま日本語のテキストに書き起こされた。シェフタル主任研究員は現在、このデータをすべて所有している。

テキストデータが手元に届くと、シェフタル主任研究員は、一次資料（広島・長崎の市や県の資料、米空軍の記録など）や評判の高い二次資料（日本語と英語の両方）と被爆者の証言の情報を照合し、確認する（場合によっては確認できないこともある）作業を何年にもわたって（現在も継続中）行った。グラウンデッド・セオリー（基礎理論）の技法がインタビュー記録に適用され、被爆者の証言に共通する

テーマや経験パターンが発見された。この技法は、しばしば既存の研究文献の空白を照らし出し、次のような新たな実りある探究につながった： 記憶活動家コミュニティの形成と慰霊碑建設との関連、そして戦後被爆者が経験したリアルタイムの、そして長期的な体験全般についてである。

この最初の分析段階の後、インタビュー対象者に（可能な限り）連絡を取り、この段階で記録の内容を再確認した。また、フォローアップ・インタビューが必要な場合もあった。また、この資料の出版という目的に沿って、このプロジェクトに使用することの許可も、この時点でインタビュー対象者に再確認し、出版物への実名使用の許可も得た（37 人中 1 人の対象者のみ、資料に偽名を使用することを要請し、この要請に従った）。

その他のフィールドワーク・データ収集

シェフタル主任研究員は、聞き取り調査に加えて、原爆資料館、原爆慰霊碑、原爆に関連する墓地などの広範な調査、慰霊式典、語り部行事、組織会議などの被爆者組織活動の綿密な観察・参加も行った。これらの活動は、広範囲にわたって写真に記録されている。シェフタル主任研究員はこのデータベースの管理者である。

研究過程における挫折の克服

この研究にとって最も重大な挫折は、COVID-19 危機の発生であった。この危機は 2020 年初頭、つまり研究が始まって 2 年も経たないうちに始まり、2023 年度の終了までほぼ続いた。この出来事は、追加インタビューデータを収集する能力を実質的に完全に停止させるという不幸な結果をもたらした。幸運なことに、シェフタル主任研究員は COVID-19 が始まる前に大規模なデータベース（前述）を作成することができたので、パンデミックの間の「休止時間」を利用して、次のことに集中することができた：既存のインタビュー・データベースの徹底的な分析、一次資料と二次資料の広範な調査、核物理学、放射線、原子医学、原子／核爆発の熱力学、核放射性降下物など、研究に関連する技術／科学分野に精通すること。シェフタル主任研究員はまた、この時期に収集した資料の書籍の執筆を開始し、ダットン・ブックス社（米国）と 2 巻（広島と長崎の被爆者の証言と原爆投下の状況に関連する歴史的・文化的背景をそれぞれ 1 巻ずつ）の出版契約を結んだ。

4. 研究成果

研究の定量的成果

シェフタル主任研究員は広島編（約 560 ページ）を執筆し、2024 年 9 月に米国で出版される予定である。彼は現在、2025 年に出版される予定の長崎編を執筆中であり、将来的に第 3 巻を執筆するのに十分な資料を持っている。現時点では、ダットン・ブックス社もこの第 3 巻の出版に関心を示している。

研究の最終評価とインパクトへの期待

シェフタル主任研究員は、COVID-19 の中断がもたらした結果に対する後悔の念によって、この気持ちはいくらか和らげられるものの、この研究で達成された結果には満足している。この研究に協力してくれた被爆者の多くがすでに亡くなってしまったので、このプロジェクトの研究者たちは、原爆生存に関する貴重な証言を収集するための聞き取り調査を、あの時に実施できたことは本当に幸運だったという思いでいっぱいである。もし調査の開始が 1 年でも遅れていたら、収集できたデータは最終的に得られたものよりはるかに少なかっただろう。現在でも何千人もの被爆者が生存しているが、現在では、被爆体験や当時の日本の生活について詳細な記憶を持つにはまだ幼かった幼い頃に原爆を体験した被爆者が圧倒的に多くなっている。被爆体験や戦前・戦中の日本の生活について詳細な「語りの記憶(narrative memory)」を持っている日本人の最年少記録は、現在 90 歳を超えている。この厳しい人口統計学的事実を考慮すると、私たちは、まだ収集可能な時期にこの「語りの記憶」データを十分に収集できたこと

で、被爆者体験の歴史的記録に大きく貢献できたと感じている。この資料が、原爆投下と被爆者体験に関する現在の、そして将来の研究者にとって、特に、より一般的には、この研究の成果が広く海外の読者に届き、そうすることによって、この恐ろしい兵器の最終的な廃絶に向けた平和の大義が促進されることを願っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Mordecai Sheftall	４．巻 電子雑誌
２．論文標題 "A Hard Day at Work: Interviewing Hiroshima Survivors"	５．発行年 2019年
３．雑誌名 OZY	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 M.G. Sheftall	４．巻 73:1
２．論文標題 (Book Review) "Flowers That Kill: Communicative Opacity in Political Spaces"	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Monumenta Nipponica	６．最初と最後の頁 115-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 M.G. Sheftall
２．発表標題 “Hiroshima Protests, Nagasaki Prays: Divergent Narratives in Early Postwar Atomic Bombing Memorialization Discourse”
３．学会等名 Asian Studies Conference Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 M.G. Sheftall	４．発行年 2023年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 11
３．書名 "Surviving a World Destroyed: Existential Trauma in Hibakusha Experience" in ROUTLEDGE HANDBOOK OF TRAUMA IN EAST ASIA	

１．著者名 M.G. Sheftall	４．発行年 2024年
２．出版社 Dutton Books	５．総ページ数 560
３．書名 "Hiroshima: The Last Witnesses"	

〔産業財産権〕

〔その他〕

"He Escaped Death As A Kamikaze"
https://www.nytimes.com/2020/12/03/world/asia/japan-kamikaze.html?searchResultPosition=2
”Il professore che ha confessato i kamikaze”
https://www.quotidiano.net/esteri/il-professore-che-ha-confessato-i-kamikaze-famosi-come-rockstar-condannati-a-morire-1.5830872
「KAMIKAZE」の実像、世界に　特攻隊員の苦悩伝える（日本経済新聞、2020年8月19日号）
https://www.nikkei.com/article/DGXMZO62792620Z10C20A8ACYZ00/
Interviewing Hiroshima Survivors
https://www.google.com/
My Grandfather's War (Channel 4; UK)
https://www.google.com/
"Kamikaze: Beyond The Fire"
https://www.intrepidmuseum.org/LatestNews/November-2019/Kamikaze-Beyond-the-Fire

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三根　眞理子 (Mine Mariko) (00108292)	長崎大学・原爆後障害医療研究所・客員教授 (17301)	
研究分担者	朝長　万左男 (Tomonaga Masao) (40100854)	長崎大学・原爆後障害医療研究所・名誉教授 (17301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関